

No. 1261

明日をきずく

—東京・代々木—

「あすをきずく青少年のつどい全国大会」が3月9日から4日間、東京・代々木のオリンピック記念総合センターで開かれました。大会は青少年の役割りを明らかにするとともに青少年問題やその活動を社会に対して理解を深めるのが目的。今年は全国の若者約300人が参加しました。開会式のあと若者たちはそれぞれのテーマごとに設けられた分科会に別れて討議に入りました。分科会では青少年活動が直面している問題点その解決方法などについて活発な意見の交換が行われました。大会2日目には皇太子殿下御夫妻がセンターを訪問、各分科会に参加され熱心に若者たちの意見に耳を傾けていました。このあと行われた懇談会では親しくお話を交わされていました。特に美智子妃殿下は若者たちの活動に興味を示されひとつのひとつの話にうなづかれました。この大会に参加した若者たちは解決すべき多くの問題に取り組んでいます。こうしたひとりひとりの地道な活動が明るい地域社会をきずくのです。

終りなき戦後

丁貴先さん(68才)。戦前、樺太に連れていかれたままの弟がどうすれば帰れるのか。それを知りたくて娘の住む東京に韓国からやってきた。

弟の丁奎泰さんは64才。望郷の念を切々と訴えた手紙に涙が出て仕方がないと話す姉の貴先さん。戦前、日本は、朝鮮半島の人々を日本人として戦場や炭鉱、軍事工場に強制連行した。その数はゆうに100万を越える。日本の敗戦で、兵士や一般日本人は復員し引揚げてきた。しかし樺太に連れていかれた4万3千人の朝鮮人は引揚げるができなかった。

戦後30年たった昭和50年12月、樺太に住むこれらの人々を原告とし国を相手どり樺太裁判が提訴された。帰還を求める訴えに国は法的責任はないと主張。そして2年が過ぎた。昭和53年3月3日国会の衆議院内閣委員会で社会党の梶野議員がこの問題で質問に立った。丁さんは関係者ともども傍聴、はじめて入る日本の国会であった。

梶野議員 一外務大臣はこれは大変な政治的責任があると思いませんか。なんとしてもこの人達をですぬ帰すことを日本政府はしなきゃいかん。

園田外務大臣 一人道的更に法律的以上の道義的的政治的責任があつて政府はあらゆる努力をしたい。受け入れ体制についても、法務、厚生各大臣と一回話し合つて検討したい。

決して終つたといえない戦後。夫を九州の炭鉱に徴用され落盤事故で亡くした。二人の兄も戦争で失つた。一人の兄は日本によって満州へ弟は樺太に連れていかれ生き別れのまま30年以上を過ぎた丁さん。

あと10年もすれば未解決のまま終止符はうたれる。丁さんの人生は日本の戦争に振り廻されたままなおも続く。